読売歌壇

小池 光 選

病む母のいのちの叫び喉笛を鳴らし感謝を告げて逝きたり　神戸市　大浜　義弘

【評】最後の最後になってもうことばが出ない。喉笛を鳴らして、残された全力を振り絞って母が発したことばは、これまでの感謝であった。厳粛きわまる一首。

文具屋の奥に置かれし地球儀をゆっくり回す少年ひとり　北名古屋市　月城　龍二

【評】ある時期のこどもにとって地球儀はふしぎな魅力あるものだ。欲しいが高価なので買ってもらえない。この少年は、かつてのじぶんだったかも知れない。

ほやほやの二年二組の孫が言う一年生はかわいいんだよ　東京都　青木　公正

【評】小学二年生になって後輩ができる。たった一つ下なのに、一年生はかわいいと言う。なんとも微笑ましい。お兄ちゃん、がんばれ。

「こころ旅」一代りに旅をしてくれる田中美佐子の風の自転車　鴻巣市　加藤　健司

十三度乗り継ぎ青春18きっぷで八十路の人は紀州を目指す　所沢市　岡田　陽一

対戦ゲームで六十七の妻五つの孫に勝ちを譲らず　三郷市　伊藤　雅之

老いてなほ朝昼晩に飯を食ふ食後の薬を飲むために食ふ　松山市　夕月　秋人

会釈しかしなかった人と語らえば笑った顔が高倉健だ　仙台市　小野寺寿子

テーブルの上のお皿の巻寿司が地球の自転と一緒に回る　守口市　小杉なんぎん

電柱が丸太木なりしあの頃のコールタールの匂ひなつかし　行田市　小河原一路

栗木 京子 選

湖畔にて横ゆれ多い列車降り風ひんやりと「ばけばけ」の町　八王子市　松田　敦子

【評】朝の連続ドラマ「ばけばけ」で注目を集めた松江市。宍道湖のほとりで列車を降りたのである。日本海側の湖畔の町の空気感が「風ひんやりと」に端的に表れている。

朝の気温ピタリと当てる特技ありそんなところで老化度チェック　東京都　内田　恵子

【評】朝方に急に冷え込むことがあれば、その逆もある。朝の気温を正確に察知する作者は鋭い感覚の持ち主である。当たるうちは老化の心配なし、という心意気に感心した。

つらい日もなぜか笑えた青春がはにかみながら今も背を押す　宇部市　小林千恵子

【評】青春時代の幸せな記憶が今も作者の支えになっている。「はにかみながら」の初々しさが心の柔軟性の源なのに違いない。

正面に見える灯台産屋坂下れば港君のふるさと　志摩市　石野みゆき

花筒に雨宿りする蟻のいてホタル袋は梅雨空に咲く　小山市　松本　道子

母の日のケーキを抱え満員の車内に硬くゆられておりぬ　生駒市　高橋　裕樹

教壇に立ちて五高の往時偲ぶ気分はまるで夏目かハーン　東京都　青山　繁

窓の無いレストランにて食事するここにあるものみんな人工　岐阜市　後藤　進

微動もせず本持ちしまま眠る夫声をかくれば何食はぬ顔　神戸市　西　和代

暮風に押され喪中の家を出てとりとめもなく友と語れり　匝瑳市　川口由美子

俵 万智 選

今までに経験をしたことがないような素敵な雨が降ります　雲南市　熱田　俊月

【評】「経験をしたことがない」は最大級の警戒を呼びかける表現として、近年よく耳にするフレーズだ。それを序詞のようにアレンジして、ロマンチックな予報が出された。

土曜日の午後の芝生の温もりを象の背中と思って撫でる　宇部市　常田　瑛子

【評】あたたかくて、ごわごわしていて、命を感じさせる芝生。そこに象を想像することで、世界は一気に広がり、スケールの大きな景色となった。

かるがもの親子が列なし池をゆく水面を閉ぢるファスナーのごと　匝瑳市　椎名　昭雄

【評】親を先頭にして進んでゆくカルガモの親子。動きに応じてできる水面のひだひだを捉えたファスナーの比喩が楽しい。

街灯のない故郷には月光の立っているような電話ボックス　東京都　鳥さんの瞼

友人に向けた言葉ははからずも自身に向けられたアドバイス　堺　市　一條　智美

ここじゃないどこかはここ以外ぜんぶ　歩けば風の産卵続く　東京都　石川　真琴

薬剤師の友が軟膏壺のないことをつぶやく深夜のエックス　千葉市　佐藤　綾子

声として投げた言葉をかき消して文字のごとくに修正したい　苫小牧市　佐藤　友樹

下の句にピタリなんだか効きそうなマルチビタミン&ミネラル　東京都　玉井　洋介

枝豆の緑に初夏は含まれて指先にある思い出を口に　名古屋市　伊藤　千春

黒瀬

選外の歌をふたたび敲く春雷

【評】「推敲」は、中国の「敲」か「敲く」かを悩んだ。それを踏まえて、歌の一首。雷鳴の瞬間、妙案が閃く。

鬲とふ漢字を思ひ浮かみそ汁を飲む

【評】「鬲」の字にはこどもとの食事中、貝殻をやはり自分もわが子を思ったのでしょう。親の欲目。会いたいとつぶやけば若の切手はいらない

【評】かすかなつぶやきに乗れば君にまで届くか。節感のなかに美しく描かれた。

噴霧器をひろがり出づる陰の生まるる

母の日は母の手打ちの蕎麦ろこびし母　さい

八重に咲く大輪椿つらつらむべきかな　横

墓訪へば隣の墓の消えてを海見ゆ

鍵盤に打ち込む君の四分休きあげ

梅雨寒きリストランテの金ルを溶けゆく灯り

熱々のモルタルに描く停けの陽は照る